読む得！在宅医療と介護の連携
～身近な事例から～ 第8回

住みなれた自宅で最期を迎えたケース

10年前から認知症がある90代後半の女性（息子家族と同居）は、5年前に大腿骨を骨折後、寝たきり状態となり、家族の介護や介護保険サービスを利用しながら自宅で暮らしていました。その後身体の衰弱が徐々に進み、時々の発熱や便秘・床ずれが生ずるなど、専門的な対応が必要となったため、1年半前から訪問看護や訪問診療も利用していました。

認知症が進行する前には「わが家で最期を迎えたい」といった本人の希望もあり、在宅のかかりつけ医に対応してもらいながら、住み慣れたわが家で過ごし、家族に看取られ安らかな最期を迎えました。

☆ポイント☆

・本人や家族の希望があれば、最期を住み慣れた場所で迎えることは十分可能です。

・訪問看護や在宅でのかかりつけ医は、医療処置や全身状態の観察とともに、終末期における本人や家族の心配や不安などの相談にも乗ります。